

資料

第16回作業科学セミナー抄録

(2012年7月15, 16日, 札幌医科大学にて開催)

教育講演*

作業療法のための作業科学の未来

ルース・ゼムケ 2

特別講演*

ヘルス・エスノグラフィ

道信 良子 15

佐藤剛記念講演

作業がつなぐ過去・現在・未来：障害を超えて生きるということ

近藤 知子 43

基調講演

作業科学の構築

ドリス・ピアス 45

ワークショップ

日常生活における作業的存在の写真：身近な作業を理解するために

小田原 悦子 46

口述発表

【作業の実践】

“作業的喪失”の概念を用いた作業療法経過の省察：一事例の経験から
妊婦に対する作業を基盤とした生活支援

高島 理沙, 他 48

～第2回ハッピーマタニティライフ講習会実施の試み～

石井 愛美, 他 49

【作業科学研究】

健康な高齢者にとってのものづくりの影響

高木 雅之, 他 50

障害のある子どもの家族が経験する社会とは—母親の手記の分析から—
日常作業の状況づけられた性質：退職における作業的場所

西方 浩一, 他 52

小田原 悦子 53

ポスター発表

【作業の実践】

復職に向け「意味のある作業」の明確化を行った一事例を通して

～対話を重視した関わり～

西尾 絵里香, 他 55

作業の可能化に焦点をあてた作業療法：デイサービスにおける発展への課題

田中 裕子, 他 56

地域で暮らす精神障害を持つ人の作業ニーズと支援プログラム

— 作業の意味の実現に向けた支援プログラムの模索と検討 —

野口 卓也, 他 57

地域在住高齢者の作業的エンパワメントを可能とする環境支援アプローチの効果

— ランダム化比較試験 (第1報) —

藪脇 健司, 他 59

特養ホームに入居する高齢者の作業ストーリーを家族と共有した経験

上江洲 聖 60

【作業の多角的視点】

身体制限を伴う高齢者の作業遂行能力から病前の作業遂行能力を予測できる可能性

齊藤 さわ子, 他 62

自宅でない場所での作業遂行練習が高齢者の遂行に対する意思に与える影響

— 作業療法介入を伴う手段的日常生活活動での場合 —

谷口 美智子, 他 63

作業療法学生における作業的公正～質問紙による定量的調査の試み～

今井 忠則, 他 64

Evaluation on Teaching of “Human Occupations” to

Occupational Therapy Students in Hong Kong

Chi-man TSUI 66

*講演原稿を本誌に掲載

第16回作業科学セミナー 佐藤剛記念講演

作業がつなぐ過去・現在・未来：
障害を越えていきること

近藤知子

帝京科学大学 医療科学部 作業療法学科

人生の途中で障害をもつということは、日々の作業がそれまでどおりに行えなくなるだけではなく、その人に期待される作業や、その人がこれからしたいと思っていた作業も行えなくなる可能性があることを含みます。障害をもつことと、絶望感や喪失感は、深くかかわり合っています。しかし、このような苦境が想像されるにもかかわらず、障害を持つ人々の中には、自信を保ち続け、自分自身でいること、自分が持っているものを楽しんでいるように見える人達います。私は、このような人達と、その生活、そして作業との関係について興味を持ち続けてきました。佐藤剛記念講演での講演のお話をいただき、どんなテーマで話をさせていただくのがよいか考え始めていた2年前、私は、片麻痺とともに、いきいきと活動をしておられる葉山靖明さんに出会いました。そこで、この貴重な機会に是非、「障害を持ちながらいきいきと生きる人の経験と作業」について究明したいと思うようになりました。

第16回作業科学セミナーは「作業科学からの架け橋：作業療法へ、学術領域へ、そして未来へ」をテーマとしています。そこで、講演は3つの架け橋を想定して構成したいと考えます。まず、この講演の為に行った、作業科学研究を紹介させていただきます。これが一つ目の架け橋です。ここでは、葉山さんがいきいきと生活することに影響を及ぼした作業を「架け橋」とみなし、研究の結果を報告します。二つ目の架け橋は、作業科学と作業療法の「架け橋」です。一つ目の質的研究で得た知識が、どのように作業療法に活用できるかについて、作業療法士としての私なりの考えを話させていただきます。作業療法の過去と未来を結ぶ懸け橋でもあります。三つ目の架け橋は、葉山さんと私との対談になります。障害をもつ当事者であり研究に協力して下さった葉山さんと、作業療法士であり研究者である私との架け橋です。対談では、先に述べた2つの橋を中心に意見を交換し合います。

今回の講演は、葉山靖明さんの人生と作業について探究した質的研究を基盤としています。しかし、この講演は、作業療法士として、作業科学に携わる者として、私が考え続けてきたことをまとめた集大成でもあります。この講演の目標は、作業科学と作業療法を結ぶことにあり、作業科学に興味を持つ方、作業療法に携わる方を含む多くの方に、「自分の経験と照らし合わせて、そういうことはあるかもしれないと納得できる」「状況や背景は違うけれど、同じようなことを自分の知っている人が言っていた」「担当する患者さんの反応の意味がわからなかったけれど、そういうことだったのか」と感じて頂くことです。

作業科学研究, 6, 43-44, 2012.

The 16th Occupational Science Seminar, Tsuyoshi Sato Memorial Lecture

**Occupations connect the past, the present, and the future:
The way of living beyond the disability**

Tomoko KONDO

Teikyo University of Science, Faculty of Medical Science, Department of Occupational Therapy

People who are recently introduced to a disability in the midst of their life may experience a hindrance in their daily occupations and what to expect and achieve in their life. Desperation and sense of loss may very well become a reality due to inabilities. However in spite of such setbacks some people remain confident and enjoy who they are and what they possess.

When I was nominated for Tsuyoshi Sato's Memorial Lecture two years ago, I began searching for the theme of my speech. Around the same time, I was introduced to Mr. Yasuaki Hayama, who suffered a severe hemi-paralysis. Despite his disability, he appeared to live life to its fullest. I immediately realized that the theme of the lecture is about Mr. Hayama and attributes of his life.

Because the theme of the 16th Occupational Science Seminar is "Bridges from Occupational Science; Toward Occupational Therapy, Academic Disciplines, and the Future", I will structure my lecture with three bridges. The first bridge will regard his individual life, the crises of his life and occupations. The findings of the qualitative study that I conducted will be described here. The second bridge will be the connection between occupational science and occupational therapy. I will incorporate the findings of my study to occupational therapy practices. In the final bridge Mr. Hayama will take part in a discussion on stage. An exchange will take place between Mr. Hayama as a client and a participant and me as an occupational therapist and a researcher.

The lecture will reflect the participant, Mr. Hayama himself. At the same time it is a compilation of my research as an occupational therapist and an occupational scientist. It is my goal that people view this lecture as plausible, applicable and useful.

Japanese Journal of Occupational Science, 6, 43-44, 2012.

第16回作業科学セミナー 基調講演

作業科学の構築

ドリス・ピアス

イースタンケンタッキー大学

作業科学の約束とは何か？ 作業科学は、変貌を遂げる歴史的な事柄に対応しつつ、その構築の最中である。作業科学がこうあるはずだったという見方をすべき時は過ぎた。作業科学の本質の根拠を、作業科学の実績それ自体と現在構築中のその構造にみることができる。作業科学には4つのタイプとして形をあらわしつつある：記述にかかわる作業科学、関連分野との作業科学、予後にかかわる作業科学、処方関連の作業科学。作業科学は、発展し、力を蓄え、挑戦に立ち向かい続けることによって、作業療法を支えるために研究を生み出すという当初の約束を到達するだろう。

作業科学研究, 6, 45, 2012.

The 16th. Occupational Science Seminar, Keynote Lecture

Building Occupational Science

Doris PIERCE

Eastern Kentucky University

What is the promise of occupational science? Occupational science is under construction in response to differing historical intents. The time for visions of what occupational science should be has passed. The nature of occupational science is now evident in its body of work and in its underlying structures. Four types of occupational science are emerging: descriptive, relational, predictive, and prescriptive. Occupational science will fulfill its debut promise to produce research to support occupational therapy by continuing to evolve, build on its strengths, and confront its challenges.

Japanese Journal of Occupational Science, 6, 45, 2012.

第16回作業科学セミナー ワークショップ

日常生活における作業的存在の写真：身近な作業を理解するために

小田原悦子

聖隷クリストファー大学

作業科学では、私たちが日常的に行う全てのすること、事柄を作業と捉える。作業はあまりに当たり前に、私たちの日常に存在しているため、その複雑さを見逃しがちである。しかし、ひとつひとつの作業には形、機能、意味がある。また、作業は、必ず時間、空間、環境に埋め込まれており、これらの文脈は、それを行う人との関係において切り離すことができない。さらに、作業には、それを行う人の独自のストーリーが必ずある。このような作業の視点は、作業の本質をつかみ取るために不可欠なものである。

今回のワークショップでは、参加者が身近な作業の写真を見ながら、その作業について話を引きだし、作業理解を深め、作業の視点を身につけることを目指します。6月の宮崎学会で、「写真を見ながら作業の話し（ナラティブ）を引きだす」デモンストレーションをご覧になった方もいらっしゃるでしょう。今回は、あなたもワークショップに身近な人の作業の写真を持参して、参加メンバーたちとお互いに作業について話し合い、作業の視点を深める経験をしましょう。ミニ講義とデモンストレーションの後、8-10人のグループ単位の演習に移ります。グループ内では、作業的視点をより深く理解するために、参加者同士では持参した写真の作業について話し合います。

ワークショップの要領：

1. ミニ講義：「作業の形・機能・意味について」（10分）

作業の形：はっきり観察可能な作業の側面。人はどのように、環境、時間、空間との関連で作業をおこなうのか。

作業の機能：作業はどのように適応に役立つのか。（生活、人生、健康に与える影響、成長、QOLの変化）

作業の意味：実際の生活や文化の文脈における作業の意味

2. 実演：「日常の作業の形・機能・意味を理解するように、話を引きだす」様子を実演する。（15分）

3. グループと演習の説明（10分）

参加者は、入り口で番号カードを取り、その番号のグループ席につく。

4. 各グループの中で、写真を持参した人は、作業のタイトルを言いながら写真を見せる。その中から、みんなで話してみたい作業の写真を1～2枚選ぶ（15分）。

初めの人、写真をグループメンバーに見せながら、その作業について語る。グループのメンバーは、作業をより深く理解するために、ミニ講義の内容を参考に、その作業のナラティブを引きだすように話に耳を傾ける。次に2番目の人が、同じように、作業について話す。一人の作業提供者の持ち時間を15分とします。（45分）

5. 全体に対して、あるグループが自分たちの作業理解を参加者全体と共有する。

6. 全体の振り返り

作業科学研究, 6, 46-47, 2012.

The 16th Occupational Science Seminar, Workshop

**Snapshot of an Occupational Being in Everyday Life:
To Understand our Occupations**

Etsuko ODAWARA

Seirei Christopher University

In occupational science, occupation is doing something, the events in our everyday life. We easily miss its complexity because it is taken-for-granted in our life. However every occupation has its form, function and meaning. Occupation is always embedded in time, space and society, so those contexts cannot be separated from its relation to the actor. Occupation also has the actor's own story. Such a perspective is required to understand the essence of occupation.

The purpose of this workshop is for participants to understand occupation and learn occupational perspective, through an analysis experience (practice) of conversing about the occupation in a snapshot they bring with them.

The participants would have watched a demonstration of the practice, (pulling stories (narrative) of occupation from a snapshot) at the OT conference in Miyazaki, in June, 2012. In this workshop, you will experience the practice of learning the perspective of occupation through conversing about occupation brought from your own life to the workshop. After a short lecture and a demonstration, participants will have practice in a group of 8-10 people. In a group, participants talk about occupation in the snapshots group members have brought, to better understand an occupational perspective.

Contents of Workshop:

1. Short lecture "Form, function and meaning of occupation" (10 minutes)
 - Form of occupation: Directly observable aspects of occupation.
How people do it in relation to its environment, time and space.
 - Function of occupation: Ways in which occupation serves adaptation.
 - The significance of occupation within the context of real lives and in the culture
2. Demonstration: Participants listening to stories to understand form, function and meaning of occupation. (15 minutes)
3. Explanation of practice (5 minutes)
 - At the entrance, each participant gets a group number card.
 - Have a seat in the group of the number on each participant's card.
4. Within each group,
 - The participants with snapshots show their photos to the group, naming the occupation depicted in the photo.
 - The group chooses one or two photos about which they would like to listen to the occupation. To understand occupation, the other members pull stories from the presenter of the photo, using questions relating to the lecture content. Finally, the group shares their understanding of occupation with all the participants.
5. Summary

Japanese Journal of Occupational Science, 6, 46-47, 2012.

《作業の実践》

**“作業的喪失”の概念を用いた作業療法経過の省察：
一事例の経験から**

高島理沙^{1,2)}, 坂上真理³⁾, 佐伯和子(PHN)¹⁾, 村田和香¹⁾

1)北海道大学, 2)介護老人保健施設恵み野ケアサポート,
3)札幌医科大学

【はじめに】 “作業的喪失”は強いられる予期しない作業の移行である1)。筆頭著者（以下、OTR）は、疾病のためにパークゴルフという意味ある作業を喪失したA氏に対して作業療法を行った。本報告の目的は、“作業的喪失”という概念を用いてA氏との作業療法を省察することである。

【事例紹介：作業的存在としてのA氏とその存在を支えるパークゴルフ】

A氏、70代前半の男性。海洋生物調査員としての船上生活で料理や囲碁等を学んだ。退職後の生活については、「時間をつぶすのに困った」と話した。知人に誘われてからは、仲間とともにパークゴルフを行うことが生活の中心になった。頸椎後縦靱帯骨化症を発症後は一切の趣味を失い、閉じこもりがちになっていた。約9ヶ月間の外来リハビリテーション後、当施設のデイケアを利用開始した。

【作業療法の経過】デイケア開始当初、A氏は“障害者”の通う所であるデイケアには来たくないと考えていた。A氏は、「パークゴルフさえできればいい」、「“障害者”じゃないっていう証拠だ」と語り、デイケア内では孤立していた。OTRは、“障害者”としての自身への否定的感情が焦燥感を生んでいると考え、現在のA氏の身体機能でも以前とほぼ同じ作業形態できる囲碁をOTRと実施した。囲碁は、A氏が自身に肯定的感情を抱く機会となった。続いて、特定の男性利用者8名とOTRとで行う料理を導入した。A氏はB氏と特に親しくなった。障害を持つ他の利用者と仲良くなったことで“障害者”への否定的感情が薄れ、デイケアでは孤立しなくなった。A氏は、デイケア内で楽しみな作業を獲得したが、パークゴルフを行いたいという思いは続いた。そこで、A氏と同じようにパークゴルフが意味ある作業であったB氏を誘って練習をしたり、同じグループでパークゴルフ場に行くようにした。A氏は、新たにB氏という馴染みの仲間を得たことで、パークゴルフを楽しむことができるようになった。

【考察】 A氏がパークゴルフをできなくなった経験を

“作業的喪失”として捉えると、その経験の意味は作業を共に行う仲間の喪失と、自分自身と生活の統制感の喪失であったと解釈できる。また、A氏にとってのパークゴルフの意味は、「楽しみな作業」から「“障害者”ではないことの証明」へと変化した。A氏は、パークゴルフを喪失したことに加えて、“障害者”が通う所と捉えるデイケアへ所属したことにより、自分自身の存在を見失う危機にさらされたと考えられる。

OTRは、経過で述べたリーズニングを基にA氏が過去に経験し、現在できそうな作業を段階的に導入した。作業的喪失の点からOTRが行った介入を省察すると、これらの作業はA氏が喪失した仲間や自分自身と生活の統制感を取り戻すきっかけを与えたと解釈できる。特にB氏は、一緒に作業を行うだけではなく、同じペースで作業を行い、互いの作業の経験を共有できる仲間であった。そして、A氏が再びパークゴルフに没頭し楽しむために必要な、作業の基盤となる存在であったと考える。

作業療法士は、クライアントが意味ある作業をできなくなったと知った際に、“作業的喪失”と捉えて何を喪失したのか探究することで、喪失を乗り越える戦略を立てることが可能になると期待される。

【文献】

- 1) Polatajko H. Backman C. Baptiste S. et al. : 吉川ひろみ(訳):状況における人間の作業, Townsend E., Polatajko H. (編著), 吉川ひろみ, 吉野英子(監訳): 続・作業療法の視点. 大学教育出版, pp61 - 89, 2011.

Reflecting on an occupational therapy process using the concept of "occupational loss" through a case study

Risa Takasima^{1,2)}, Mari Sakaue³⁾

Kazuko Saeki(PHN)¹⁾, Waka Murata¹⁾

1) Hokkaido University, 2) Megumino Care Support,

3) Sapporo Medical University

【Introduction】 Occupational loss is an imposed, unanticipated occupational transition¹⁾. The first author (OTR) performed occupational therapy to one client, Mr. A, who had lost a meaningful occupation, park golf, because of a disease. This study aims to reflect on the occupational therapy he underwent, using the concept of "occupational loss."

【The case introduction - Mr. A as an occupational being and park golf supporting the being】

Mr. A was a man in his early 70's. He was a marine researcher, and learned cooking and go through the shipboard life.

“Though”, he said, “I found it difficult to kill time after retirement.” After his acquaintance invited him to park golf, playing it with his companions took the lead in his life. However, he stopped doing all his hobbies, including park golf, after showing the symptoms of ossification of the posterior longitudinal ligament.

【The process of our occupational therapy】 Since the facility was the place for “disabled people,” he didn’t want to go there at first. He said, “I should be able to play park golf again,” and “it is proof that I haven’t become a disabled person.” He became isolated in the facility. OTR thought that his negative feelings as a “disabled person” fretted him. OTR played go with him, because he could play it without changing his occupational form. Go became the opportunity to make him develop positive feelings about himself. OTR introduced cooking, which she and Mr. A did with seven other users. He especially built a good relationship with one member, Mr. B. and this caused his negative feelings against “disabled people” to fade out. However, he continued wanting to play park golf. Therefore, OTR invited Mr. A and Mr. B to practice park golf, and went to park golf courses with them, because it is also a meaningful occupation for Mr. B – and this led him to enjoy park golf again.

【Consideration】 If his experience to lose park golf is considered an “occupational loss,” the significances of the experience can be interpreted as follows: the loss of partners with whom to share occupations, and the loss of feeling of control over himself and his daily life. Before his condition worsened, park golf was an occupation that gave him pleasure. However, After he became unable to play park golf, the meaning of his occupation was to show others that he is not disabled. In addition, being at a facility for “disabled people” would make him anxious. OTR introduced gradually occupations which he was currently able to do on the basis of reasoning revealed above. To reflect on the therapy using “occupational loss,” these occupations would give him an opportunity to regain the partners and the feeling of control over himself and his daily life. Moreover, Mr. B might be a partner with whom to share occupations, and a base for Mr. A to enjoy park golf again. When occupational therapists find that their clients have been not to be able to do meaningful occupations, they should explore their loss using the concept of “occupational loss” so that they’re able to develop strategies to support their clients with the process of getting over the loss.

妊婦に対する作業を基盤とした生活支援 ～第2回ハッピーマタニティライフ講習会実施の試み～

石井愛美¹⁾, 齋藤さわ子¹⁾, 遠藤佳奈¹⁾, 加納尚美²⁾

1) 茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科

2) 茨城県立医療大学 保健医療学部 看護学科

【はじめに】 女性にとって妊娠・出産期は、身体的、精神的、また社会的にも様々な変化が起こる時期である。それをサポートする母親教室は、出産準備教育として大きな役割を担っている。しかし、現在の母親教室では、初産婦にとって育児用品や産後の過ごし方など様々な妊婦の心配事は解決しないことが指摘されており、内容の見直しや充実の必要性が指摘されている¹⁾。

妊娠期は、母親自身の体の痛みや心身の変化に加え、胎児への影響を配慮しなければならないため、様々な作業を遂行することや、これまで担ってきた役割を果たすことが難しくなることも多い。妊娠前と同じ方法で行うことで心身への負担を増大してしまうことも少なくない。さらに、産後の子どもとの生活は、育児という新しい作業が加わることで生活が一変することへの不安も非常に大きい。一方で、母親自身が作業が思い通りに出来ない場面に遭遇しても、自分で対処できる方法を知っていることで、問題に対しても前向きな気持ちで対処でき、充実感や満足感を得ながら育児ができるという報告もなされており²⁾、妊婦が持つ問題を作業の視点から支援することは、妊婦の心配事の一部を解決し、健康を促進する可能性は大きい。そこで妊娠・出産期における女性を対象に、作業を基盤とした妊婦への生活支援の試みとして、第2回マタニティライフ講習会を実施したので報告する。

【講習会の実施】 1) 参加者：保健センターなどにポスター貼ったり、ミニコミ誌を通して参加者を公募した。第1回講習会では公募参加者に加え、母親教室の経験豊富な助産師に参加を依頼し、現行の一般的な母親学級との違いが明確にあること、本講習会が妊婦への生活支援の一助となりえることを確認した。今回報告する第2回講習会では、公募参加者に加え、さらに講習会の作業を基盤とした内容を発展させるために、公募参加者に加え、本講習会の内容が作業を基盤とした妊婦の生活支援となっているか、より必要とされる作業を基盤とした支援の必要性やあり方がないかを確認するため、作業療法士の資格を持ち、かつ参加時に妊娠をしている人に参加を依頼した。2) 講義・演習内容：テーマは母親の作業の視点から、すぐに生活で実践できることを中心に選択した。また、実際に参加者に体験をしてもらいその場で技能が

身につくことを目標に構成した。具体的には、2名の作業療法士により、①家事を中心とした生活の中の様々な活動を妊婦が心身ともに快適に行うための方法、②親の身体的負担を軽減する赤ちゃんのお世話の方法、の2部構成の内容で全1時間半の講義・演習を行った。〈結果〉本講習会に参加することで、妊娠後期や産後の作業的見通しが付きやすくなり、また、母親自身の作業選択のあり方や作業遂行の方法を見直すことが、自らの健康や子供への関わり方につながっていくことの理解が深まっていることが参加者の感想から確認された。さらに、妊婦であり作業療法士の参加者からは、育児や家庭管理に関わる作業が、作業バランスを見直したり、代替法の利用や環境調整をすることで、改善できることを改めて実感されており、本講習会が作業を基盤とした内容であることが、講習会開催メンバー以外からも確認された。また、本講習会で扱った技能が、本講習会で扱った作業以外にも応用できる可能性の指摘を得ることができた。

【今後の展望】これまで少人数で開催であったため、今後は、多くの参加者を募るため市町村の母親教室との連携を図り、通常行われている母親教室の規模で作業を基盤とした妊婦支援のための講習会の有用性や意義について検討していきたい。

Developing a workshop for promoting daily life of pregnant women by using occupation-based approach

Aimi Ishii, Sawako Saito, Kana Endo, Naomi Kano
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

During pregnancy, many women face difficulties managing their daily life. Although there are workshops preparing for childbirth in Japan, it has reported that many pregnant women showed dissatisfaction and their concerns for new life with a baby were not resolved by those workshop. There are needs for another type of workshop to support them. We have developed a workshop for promoting daily life of pregnant women by using occupation-based approach. The workshop is focusing on the occupation of pregnant women and parents just having a new baby. We had the second experience to have the workshop called “The Second Happy Maternity Life Workshop”. The purpose of this study was to examine the effectiveness and to have suggestions to improve the workshop. The result of this study showed that the effectiveness of the workshop was confirmed and there were a several suggestions in terms of the teaching method.

【参考文献】

- 1) 玉上麻美, 小山田浩子, 廣田麻子: 妊婦の育児不安軽減のための援助方法に関する研究—初産婦・経産婦のニーズ調査より—. 大阪市立大学看護学雑誌, 3: 25~31, 2007.
- 2) 西出弘美, 江守陽子: 育児期の母親における心の健康度 (Well-being) に関する検討—自己効力感とソーシャルサポートが与える影響について—. 小児保健研究, 70 (1): 20~26, 2011.

《作業科学研究》

健康な高齢者にとってのものづくりの影響

高木雅之, 吉川ひろみ, 石丸進
県立広島大学

【はじめに】古来から人間はものづくりを行ってきた1). 産業化の進展に伴い、ものづくりが健康に与える影響よりも生産性を高めることが重視されてきた2,3). ものづくりを通して作り手の健康を増進していくためには、ものづくりが作り手に与える影響を明らかにする必要がある。本研究の目的は、健康な高齢者の経験からものづくりが作り手に与える影響を明らかにすることである。

【方法】ものづくりを行っている市民団体に所属している6名を対象とした。本団体のメンバーはものづくりを自ら進んで習慣的、継続的に行っており、ものづくりの影響について語ることができると考えたため、彼らを研究対象とした。対象者はすべて60歳以上で、ものづくりを週1回以上の頻度で、2年間以上継続して行っていた。対象者が行っていたものづくりは、押し花、木工、鉄工、裂き織、粘土、藍染であった。データ収集は半構造的インタビューを用いた。「普段どんなものを作っていますか」「もの作りをすることでどのような影響がありましたか」「もの作りのやりがいは何ですか」「なぜもの作りを続けていますか」といった質問を対象者に行い、適宜質問を追加した。5人目、6人目のインタビュー内容を分析した結果、新たなカテゴリーが出現しなかったため、理論的飽和に達したと判断しデータ収集を終了した。インタビューデータは研究者2名によって質的に分析された。データを切片化し、それぞれにラベルをつけて、内容の類似性に従ってカテゴリーを作成した。データ分析後、対象者は出現したテーマが自身の経験に合っているかを

確認した。倫理的配慮として、インタビュー前に研究の目的等について対象者に説明し、研究協力の同意を得た。なお、本研究は県立広島大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】分析の結果、もの作りの影響として6つのカテゴリー（精神機能の活性化、人間関係の発展、ものづくり技能の向上、健康的生活習慣の形成、問題の発生、作業の拡大）が出現した（図）。もの作りは対象者に楽しみや喜びの感情を引き起こし、対象者の思考を活性化し、ストレスを軽減し、自己肯定感を高めることで精神機能を活発にしていた。また、ものづくりによって人間関係は広がっていた。さらに、ものづくりは作り手の技能を高めていた。精神機能の活性化、人間関係の発展、ものづくり技能の向上は相互に影響し合い、健康的な生活習慣を形成することに貢献していた。また、もの作りを通して材料費や材料と作品の置き場の問題が発生していた。これらの問題は思考の活性化、人間関係の活用、ものづくり技能の向上によって解決されていた。さらに、問題を解決する手段の1つとして作業の拡大が起こっていた。作業の拡大は精神機能の活性化、人間関係の発展、ものづくり技能の向上を促進していた。

【考察】本研究からものづくりは身体的、精神的、社会的健康に貢献することが示唆された。またものづくりによって起こる問題は、作り手の健康を促進し、作業を拡大するチャンスになる可能性がある。本研究結果を基にものづくりを通しての健康増進を考えていくことができる。

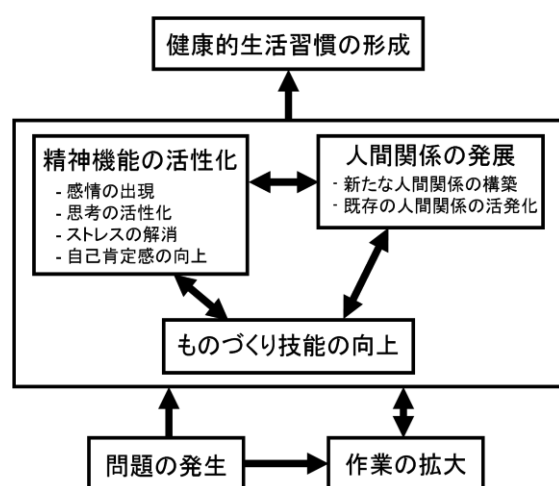


図 ものづくりの影響

The effects of engaging in crafts for healthy older people

Masayuki TAKAGI, Hiromi YOSHIKAWA,

Susumu ISHIMARU

Prefectural University of Hiroshima

Introduction: Human being have made thing from ancient time¹⁾. As industrialization progressed, Increasing the productivity was regarded as more important than the effects of participating in crafts for crafters' health^{2,3)}. To determine functions of crafts is needed for health promotion through engaging in crafts. The purpose of this study was to explore the effects of engaging in crafts through experiences of healthy older people.

Method: Members of a citizens' craft group creating craft items from recycled materials were invited to participate in this study. Six members agreed to participate in this study. They were over 60 years old and had experiences of crafts including pressed flower, woodwork, Metalwork, textile art and clay for more than 2 years. The data were collected through semi-structured interviews with participants. Data gathering was continued until no new or significant insights were coming from the data. Interview data were analyzed thematically by two researchers. After the data analysis, participants were invited to check that the themes accurately reflected their experiences.

Findings: Six themes emerged from the data: activating psychological functions, developing social relationships,

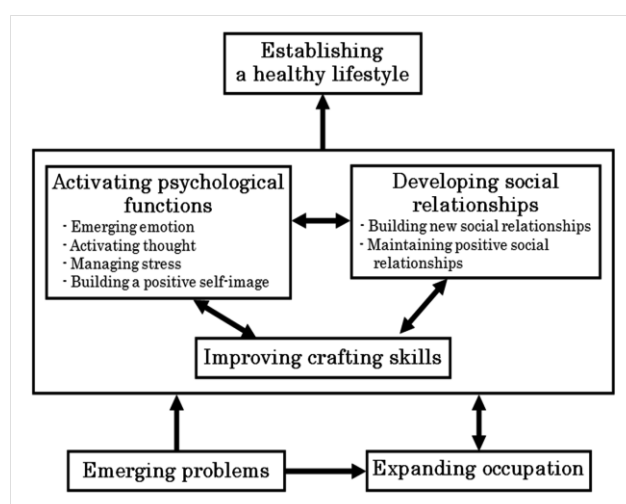


Figure: Effects of making crafts

improving craft skills, establishing a healthy lifestyle, emerging problems and expanding occupation. Participating in crafts contributed to increased psychological functioning, stronger

social relationships and improved craft skills. These three themes are interrelated to each other, and guided the establishment of the participants' healthy lifestyles. Problems such as the cost of materials, and space to keep materials and products emerged through engaging in crafts. Those problems were solved by promoting psychological function, social interaction and craft skills. Furthermore, it was found that participants engaged in other occupations as means of problem solving. The expanding occupation and three themes facilitated each other. The relationships among themes were showed in figure.

Discussion: This study suggests that participating in crafts contributes to the physical, mental, and social well-being of healthy older people. It is indicated that problems that emerged from participating in crafts might be a trigger for promoting the health benefits of crafts and expanding occupation. This finding would be useful to envision health promotion through engaging in crafts.

- 1) Tubbs, C., & Drake, M.: Crafts and creative media in therapy (4th ed.). Thorofare, SLACK Incorporated, 2012.
- 2) Pierce, D.: Occupation by design. Building therapeutic power. Philadelphia, F. A. Davis, 2003.
- 3) Wilcock, A. A.: A theory of the human need for occupation. Journal of Occupational Science, 1(1), 17-24, 1993.

障害のある子どもの家族が経験する社会とは—母親の手記の分析から—

西方浩一^{1,2)}，小田原悦子²⁾

1)文京学院大学, 2)聖隷クリストファー大学大学院

【はじめに】日々の作業の中で社会とのつながりをもつことは、人々の満足や健康に必要である。一方で、障害者や家族にとって、日常生活における社会との交流の乏しさやそのあり方は、不安のもととなり健康に影響を及ぼし^{1,2)}、生活の困難やストレスをもたらすと指摘される^{3,4)}。

子どもとその家族の作業の研究には、育児が日常生活の中でどのように構成されているかや、母親と子どもが行う遊びやコミュニケーションを共作業として注目したものが多いが、家族の作業の研究では、社会との関わりを視野に入れたものは見られない。

【目的】障害のある子どもの母親の視点から、家族の作業を社会との関わりを視野に入れて理解する。

＜方法＞本発表では、発達期の障害のある子どもの母親の経験を理解するためにその手記を分析した。母親の主観的経験が多く記述されているという理由により、石井めぐみ著「笑ってよ、ゆっぴい」⁵⁾をブルーマー⁶⁾の提唱するシンボリック相互作用論を参考に分析した。ブルーマーは、社会を制度や集団ではなく、参加する人間が人、物、考えなどを対象にして行う行為を通して、主体的に形作るものであり、時時変化する流動的な過程であると捉える。人は、自分が対象に持つ意味にのっとって、行為し、その相互作用を通して、意味は変化し続け行為に影響すると考えた。本発表では、母親が人や物などに作業を通して関わり、変化する経験の過程を社会として表わす。

【結果】母親の社会との経験は以下のように、変化したことが分かった。

①障害児の母親になり、生き方に迷う。②子どもを健常児に近づけるために訓練中心の生活に没頭していた。しかし、③子どもからの負の反応や先輩である障害児の母親たちとの出会いにより、訓練に専念していた自分の作業選択を反省した。④買い物、子どもの就学、など、家族の作業を行う難しさを経験した。⑤周囲の人々が、自分たち家族のありのままの姿を受け入れることによって、安堵感や自信を持った。

考察：母親は、家族がありのままに受け入れられる経験や障害児の母親との出会いから我が子との生き方を学んだ。また、それらは、子どもと共にたくましく生きることや、家族の作業を作るきっかけになるのではないかと考えられた。

【文献】

- 1) Law, M. (2002). Participation in the occupations of everyday life, 2002 Distinguished Scholar Lecture. American Journal of Occupational Therapy, 56, 640-649.
- 2) 中根成寿 (2007). コミュニティソーシャルワークの視点から「障害者家族」を捉える：障害者家族特性に配慮した支援にむけて. 福祉社会研究, 7, 37-48.
- 3) Dyson, L.L. (1997). Fathers and mothers of school-age children with developmental disabilities: parental stress, family functioning, and social support. American Journal of Mental Retardation, 102, 267-279.
- 4) 中川薫・根津敦夫・宍倉啓子 (2007). 在宅重症心身障害児の母親のケア役割に関する認識と well-being への影響. 社会福祉学, 48, 30-42.
- 5) 石井めぐみ著：笑ってよ、ゆっぴい. フジテレビ出

版.

- 6) Herbert Blumer (1969). Symbolic Interactionism Perspective and Method. Englewood Cliffs, New Jersey, U.S.A.: Prentice-Hall, Inc. 後藤将之.(1991).シンボリック相互作用論パースペクティブと方法H・ブルーマー勁草書房東京

Making a Place in Society: Analysis of literature by mothers of children with disability

Hirokazu NISHIKATA^{1,2)}, Etsuko ODAWARA²⁾

1) Bunkyo Gakuin University, 2) Seirei Christopher University

Introduction: People relate to society through their everyday occupations. However, poverty of everyday life engagement with society can negatively affect the life satisfaction and health of the families of children with disabilities. For parents of children with disabilities, their interaction with society can produce stress and alienation, negatively affecting their well-being.

In occupational science research, studies have focused on the daily routines of family and children and have observed mother and child co-occupations. However, research is lacking which considers the viewpoint of the parent of children with disabilities regarding how they relate socially to their communities.

Purpose: The purpose of this study is to understand, through occupation, from the mother's viewpoint, the relationship with and place in society of families of children with disabilities.

Method: I analyzed "WaratteyoYuppii (Smile to me, Yuppi!)", by Megumi Ishii, a mother of a child with disability, using Blumer's symbolic interactionism¹⁾, because Ishii's work includes her subjective experience. Blumer views society as actively formed by people's interactions. It is seen as a fluid process which changes as humans interact with others on the basis of the meanings that the others have for them. Meaning continues to change through social occupations and influences the interaction and vice versa. In this presentation the results are from the analysis of the process of the mother's meanings and occupations changing through experience.

Results: The mother's experience of society changed as follows:

1. Megumi (the mother) did not know how to live in society with her baby with disability.
2. The mother became engaged in the child's physical training, expecting her to become healthy. However,

3. She experienced difficult participation in community family occupations, such as shopping and taking her child to school.
4. She realized her occupational choice, concentrating on her child's training was wrong, through her child's negative reaction and through social occupations with other mothers who had children with disability.
5. Megumi developed a sense of security and confidence as she experienced her family being accepted by people in the society around her.

Conclusion: Through her experience with social occupations with other mothers who had children with disability, the meanings of these interactions changed and in turn changed her relationship with society.

1) Herbert Blumer (1969). Symbolic Interactionism Perspective and Method. Englewood Cliffs, New Jersey, U.S.A.: Prentice-Hall, Inc.

日常作業の状況づけられた性質： 退職における作業的場所

小田原悦子
聖隷クリストファー大学

退職の概念には、経済的、心理的、社会的な三つの定義があり、明確ではない。しばしば退職は、成人期から高齢期の狭間に出現し、その始まりは明らかでない。先行研究によって、退職後の日常生活の状況には多様な変化が起こることが指摘されている；ゆっくりした生活リズム；日常作業、日課の変化。退職を経過する間に、日常作業に対する個人的な意味も変化する¹⁾。退職は、出来事というより、自由と人生・生活への態度を学ぶようになる移行過程である²⁾。

本研究は、退職者が退職による日常作業の変化をどのように経験しているかを理解するために、12人の退職者を対象に、半構成的インタビューと参加観察によりデータを収集し、現象学的アプローチにより分析を行った、大規模な質的研究の一部である。結果：働き盛りから定年退職、完全な離職への退職の経過の中で、仕事に直接関係のない部分を含む生活全体が変化してゆく状況に影響されながら、その状況に適応しながら、日常作業は作られられていた。つまり、退職の過程における日常作業には状況づけられた性質があることが理解された。さらに、退職者たちは退職の過程で、自分の作業的場所が移行していくのを経験していた。彼らの主要な作業的場

所は、仕事中心から、家族作業、趣味、レジャー作業、地域の作業に移行することがわかった。ある作業的場所が後景に退き、別な作業が徐々に前景に表れていた。本発表では、66歳の職人、寺井（仮名）の例を使って、作業的場所の移行と作業の状況づけられた性質について述べる。

15歳の時に、寺井は車両製造工場で働き始めた。彼は、仕事で信頼される熟練工になろうと懸命に頑張り、彼のアイデンティティーは、仕事へのワーカホリックな（仕事中毒的）参加によって、形成されていった。彼はほとんど家族と過ごすことはなく、週末さえ仕事の同僚と一緒にだった。60歳の時、定年退職になったが、工場に残り、若い職人の指導役として働き続けた。しかし、仕事時間は短くなり、彼はむなしさを感じ、自信がなくなっていた。彼は、自分が職場の中心からはずれ、家庭の中心にもいないことに気づくようになった。家庭で「新参者」の参加者として、家事をするようになり、妻を経験のある家事の専門家として尊敬し、孫との交流を楽しむようになった。

65歳の時、寺井は、それまで働いた工場を離れ、小さな工場に職を見つけた。彼はもっと家族と一緒に作業して過ごすようになり、交通巡視係りとして地域に参加するようになった。彼は、成熟した職人としての生活の後に、家庭や地域に充実して参加するように、新しい作業的場所を開拓し続けることを楽しみにしている。

文献

- 1) Jonsson, H., Borell, L., & Sadlo, G. (2000). Retirement: An Occupational Transition with Consequences for Temporality, Balance and Meaning of Occupations. *JOS*, 29-37.
- 2) Hodkinson, P., et al. (2008). Retirement as a Learning Process. *Educational Gerontology*, 167-184.

Situated nature of everyday occupation: Occupational place in retirement

Etsuko Odawara

Seirei Christopher University

The concept of retirement is problematic with three definitions: economic, psychological and sociological. Its beginning is often unclear, emerging between mature adulthood and old age. Research has suggested a wide variety of changes in everyday contexts: slower rhythm in life; transformation of daily

occupations and routines. The personal meaning of occupations also transforms through retirement¹⁾. Retirement is a transitional process rather than an event, leading to new attitudes toward life²⁾.

This is a sub-study, part of a larger in-process qualitative study of the experience of retirement of 12 retirees, collected from unstructured interviews and analyzed with a phenomenological approach, to understand how retirees experience changes in occupation throughout the retirement transition from full employment through mandatory retirement to complete withdrawal from employment. It documented the situated nature of everyday occupation, occurring in full environmental context, influenced by the whole changing life situation, not only employment. The retirees experienced their main occupational place shifting, with the workplace withdrawing to the background and one focused on family occupations, hobby or leisure activities and local community occupations coming to the foreground. This presentation uses a case example: a 66 year-old retired craftsman, Nail.

At 15 years-old, Nail started working at a car parts factory. His identity was established through workaholic participation in his job, as he was inspired to become a mature and skilled craftsman, trusted at work. He rarely spent time with his family, spending even his weekends with his coworkers. At the age of 60, he had mandatory retirement, but remained, working as an advisor of young workers. However, he worked less time and felt empty and less confident. He recognized that he was out of the center of the work circle, but not at the center of his home circle either. As “a new comer” to family participation, he started doing house chores, gained respect for his wife as an experienced homemaker, and enjoyed interactions with his grandchildren.

At 65, Nail left the factory and found part time work at a smaller factory. He spent more time with family occupations and came to participate in his local community, acting as a school traffic guard. He is looking forward to continuing to develop his new occupational place situated as a mature home/community participant.

《作業の実践》

復職に向け「意味のある作業」の明確化を行った一事例を通して～対話を重視した関わり～

西尾絵里香, 渡部夏子
たたらリハビリテーション病院

【はじめに】

発症から間もない時期に、クライアントにとって意味のある作業を共有することは難しい。それまでの時間、空間の中で経験してきた作業から離れた状況であること、馴染みのない身体状態と空間であることも影響していると思われる。今回、退院後に漁港での復職が予定されているクライアントを担当した。彼は機能回復が復職の条件だと思い込み、OTとの対話は身体機能に関することが多かった。OTは漁港への復職という作業形態(occupational form)から、具体的な作業的機能(occupational function)と作業的意味(occupational meaning)を引き出して物語を共に作り上げていくことを意識した。医療を象徴する病院という空間、時間の中で、クライアントと退院後の生活イメージの構築を試みた介入を報告したい。今回の発表に対しクライアントへの説明・同意を得ている。

【事例紹介】

A氏, 40歳代男性。ラクナ梗塞により右片麻痺を発症。発症から約半年経過し漁港でのアルバイトを目標に上肢機能向上、歩容改善を希望し当院へ入院となった。[OT評価]介入当初COPMで復職に関する項目として「箱の運搬」が挙げられた。重要度10、遂行度、満足度はともに1であった。クライアントにとって漁港での復職は、社会参加する上で役割の再獲得であり、今後自ら生計を立て、存在意義を感じられるという意味があった。[介入基本方針]機能回復が可能であると判断し、機能訓練を行うこと。また、漁港での復職場面を想定した環境下で、箱の運搬練習を行うこととした。A氏自ら課題を見いだせるような関わりを心がけた。[介入経過]介入当初、身体機能面の改善に対する期待が高かった。COPMを用いて作業を明確化し箱の運搬を模擬的環境下で実践した。体験と関わりを通して作業遂行に対する気づきや新たな目標を立てられるようになっていった。[結果]約2か月間の介入により復職の遂行度8、満足度9と向上を認めた。

【考察】

クライアントが希望する復職という漠然とした目標にOTは戸惑っていたが、COPMを評価する過程で作業形態

をより具体化した。その結果、作業的機能や意味に焦点を当てることが可能となり、作業に従事しているイメージを共に作り上げることができた。一方、病院の中で行った作業参加に向けた練習は、作業的機能や意味が明確化しているからこそ、作業形態が変化しても新たな作業や役割を生み出し生活に汎化される要因となったと思われる。つまり意味のある作業を通して新たな方法で復職するイメージ作りを促進することは、自分らしさを得て健康に繋がると思われる。今回、機能回復に焦点を当てた対話をするクライアントであっても、作業形態や作業的機能の中にある作業的意味を引き出すことの重要性を再確認できた。臨床場面では身体機能面の改善に目が向き、目標が漠然とした中で将来の生活イメージを描くことが困難なクライアントが少なくない。今後もそのようなクライアントに対して入院期間中から作業を通して不安の解消やイメージの構築を援助する必要があるといえる。

【文献】

- 1) 吉川ひろみ(著):「作業」って何だろう。医歯薬出版株式会社, 82, 2008.

A Case Study Carried Out to Clarify "Meaningful Occupation" to Return to Work

Erika Nishio, Natsuko Watanabe
Tatara Rehabilitation Hospital

Introduction :

It is difficult for a client to recognize the significance of "meaningful occupation" provided by the occupational therapist shortly after the onset of disease. The reasons include the fact that the tasks they undergo are different both temporally and spatially from the ones they had been used to prior to disease. We were in charge of a client who had a plan to get back to work at the port after discharge. He thought restoring function was a necessary condition to return to work. Based on the occupational form required for returning to work, we tried to share with the client necessary occupational function and the meaning. Here, we report the case in which occupational story telling was attempted with the client.

Introduction of the case :

Client A, a forty-year-old male had right hemiplegia due to lacunar infarction. He was hospitalized for improvement of the right arm function and walking. His goal was to work part-time at the port a half year later.《OT assessment》At the beginning of therapy, "carry boxes" was suggested. The importance level

recognized by the client was 10, but performance and satisfaction levels were 1. For the client, returning to work at the port meant regaining his role in society, which also meant regaining his future productivity and *raison d'être*. 《treatment principle》 We assessed functional recovery was possible and began rehabilitation of “carrying boxes.” We tried to involve him in finding tasks for himself. 《process》 At the beginning, he had a high expectation for physical functional recovery. We used COPM to clarify the meaning of the task and performed it under a mock port situation. Through this approach, he came to gain understanding and to make new aims. 《result》 After two-month therapy, performance and satisfaction levels increased to 8 and 9.

Discussion:

At first, we were confused by the client's unspecific wish to return to work. However, through the process of using COPM, we were able to figure out steps required to fulfill that wish. Tasks which aimed for returning to work allowed him to realize his future working style because the occupational function and meaning were clarified. Meaningful occupation promotes to build the image of returning to work and acquiring self-esteem, which leads to the client's well-being. Even with a client who focuses on physical functional recovery, we could re-acknowledge the importance of extracting occupational meaning within occupational form and function. In clinical scenes, a client has tendency to focus on physical functional recovery and have difficulty imaging future life style. We suggest that it is important for a client to know the significance of "meaningful occupation" with the future goal in mind from the early stage of hospital stay.

作業の可能化に焦点をあてた作業療法：デイサービスにおける発展への課題

田中 裕子, 田村 浩介
いきがいのまちデイサービス

【はじめに】 筆者らは、現在、沖縄市において、介護保険に基づく通所介護および介護予防通所介護事業「いきがいのまちデイサービス」を運営している。設立の動機は、①通所介護施設における役割の一つに自立支援があること、②運動技能の低下によってやりたいことをあきらめているクライアントに対し、作業に焦点をあてた作業療法によって作業を獲得し、自信の回復に至った筆

者らの経験があったこと、③作業療法士の役割はクライアントの作業の可能化であり、その実践の場をつくること、④近隣地域に作業療法士が配置されている通所介護施設が少ないことであった。

【目的】 作業療法白書 2010によると、介護保険領域の作業療法手段の1位が基本的動作訓練であった。これは生活に関連する作業を用いない訓練のことを指し、全体の97.3%とのことであった。

当デイサービスの作業の可能化に焦点をあてた作業療法実践を報告し、デイサービスにおける発展への課題を考察する。

【方法】 デイサービスの理念は、「ご利用者のみなさまのいきがいあふれる人生のお手伝い」である。利用者一人一人の作業に焦点をあてた作業療法実践のために作業療法士を常勤で3名配置、関わりを多く持つために定員は10名とし、個々の利用者の作業ニーズを明確に理解し、実際にその作業を獲得することを作業療法実践の目標に実践した。その結果と課題を検討する。

【結果】 A氏は病前のように友人との交流を楽しめるようになりたいと話し、色々なカフェに行く計画から練習まで実施した事で、誕生日に久しぶりに友人と外食することを楽しめた。B氏はまずは卵料理ぐらい出来るようになりたいと話し、料理練習を通した成功体験や、他利用者からの賞賛や励ましにより、卵料理以外の料理も実現可能になり妻や母としての役割を再獲得している。C氏は自宅でも興味のある野菜作りが出来るようになりたいと話し、通所にて野菜作りを経験し自分でも出来るという自信から、家族の協力のもとプランター菜園をはじめ、いきいきと生活している。これらの作業的体験を通してクライアントは「ここは利用者を中心に考えてくれる。やりたい事を支援してくれるから、出来ることが広がった。」などと話している。数名の利用者を担当している介護支援専門員へのインタビューから、「作業療法士3名体制について、(運動技能に対する)機能訓練だけでなく、やりたいことを引き出し支援してくれるので、結果も出ているし本人や家族の満足度も高い。集団行動が苦手な方、第2号被保険者、具体的な作業ニーズがある方に特に向いていると感じる。」などという意見を頂いた。一度紹介して頂いた介護支援専門員から評価をもらい再び紹介頂く事も多い。

【考察】 利用者一人一人の作業の可能化についてはまだ結果が十分に出ておらず、今後も継続して理念に基づきクライアントの作業を理解しようと努め、クライアン

トと共に作業の可能化に向かった介入を選択し続けていきたい。小規模の通所だからこそ作業的挑戦が可能であり、利用者同士で物語を共有しやすい。この環境は作業的存在としての感覚を確認する上で役立つだろうと思われる。さらに現在、介護保険サービスを終了しても住み慣れた地域でその人らしく生活していけるよう、また地域住民の健康に貢献するために自治体との連携をはかっている。今後は、地域のニーズも把握しながら、必要に応じたサービスも展開していきたいと考える。

Focusing on Occupational Therapy: Challenges to the development of day service

Yuko Tanaka, Kousuke Tamura
Ikigai No Machi Day- service

Introduction: As certified Occupational Therapists (OT), we manage a Care facility where the people need either nursing, or pre-nursing services at Ikigai-no-Machi Care facility. The distinct purposes for establishing this facility are: 1. There is an absolute need to support these clients. We have the ability to restore our clients to independence again. 2. We have specific experience in returning clients to their former independent selves. Clients, who had almost given up on their recovery, now stand on their own again. We focus on using our clients' abilities to restore their confidence through the practice of occupational therapy. 3. Our goal is to provide a space for clients to remain fully engaged, and continually working towards their complete rehabilitation. 4. There is a rampant shortage of occupational therapy facilities in the small districts where this level of care is most needed. Purpose: According to the book, "Occupational Therapy 2010", the practice of basic movements is the first priority for all clients in relation to their individual nursing care insurance plans. It also states that 97.3% of all people are not receiving the necessary OT training. We are considering expanding our care facility so as to focus specifically on physical therapy. Method: Our philosophy is "Support the full life of our clients". Our aim is to support our clients by providing three OT sessions daily to focus on practical rehabilitation. We limited ourselves to a maximum of ten clients so that we are better able to focus on our clients' needs. Accordingly, we try to support their capabilities in a better setting. Results: 1) Mr. A: Wants the ability to enjoy his friends/family as he once did by his disease. His therapy for this situation is to practice going to the nearby café one short step at

a time. 2) Mr. B: I would like to cook for ourselves again. My wife's role as a mother and wife is to prepare meals for our family. Through cuisine practice via OT, same day soon we will be able to enjoy eggs again. 3) Mr. C: Wants to regain the self-confidence to start planting his vegetables, and once more, with help him from the OT practitioners, and Mr. C's family, his home garden planter will become lively once more. As through all these results: Our clients said, "OT working at this facility considers us first. They motivated our self-confidence that makes us want to do more by their support". We have had an interview with a Long-Term Care Support Specialist. She said that "Having three OT are very supportable, not only provide for rehabilitation, but because we provide for their specific demands and requests. I believe this care facility is suitable for clients who are not good at getting along with others, second-insured person. Clients have specific requests not normally provide by other practitioners". We are also introduced by other care-manager through these evaluations and they bring us clients. Consideration: There are no sufficient results of our specific therapy for supporting our clients so far. We continue to make our efforts to make it real and understand our clients' desire. Even though our facility is a small scale but we believe that it will be able to reach out our aim and also our clients are able to share their experiences. Furthermore, we try to expand our desire for supporting services, which is based on our viewpoint to that of a small district and we will try hard to work in close cooperation with the local government.

地域で暮らす精神障害を持つ人の作業ニーズと支援プログラムー 作業の意味の実現に向けた支援プログラムの模索と検討ー

野口卓也¹⁾, 港美雪²⁾

1) わに診療所デイケア新田, 2) 愛知医療学院短期大学

【はじめに】作業科学の発展と共に、近年、作業療法ではクライアントの健康や幸福につながる、実生活における作業の可能化を目指すようになった。しかし、精神科領域の作業療法やデイケアなどにおける集団プログラムの実施を個々のクライアントの実生活における作業（以下、作業）の可能化につなげるためには、作業がどのように健康を促進するのかに関する作業科学の知識と、その知識を実践向け、どのようにわかりやすく説明することができるのかの検討が必要である。そこで、筆者らは、

地域で暮らす精神障害を有する人の作業ニーズについて理解を深めることを目的とした研究を実施し、その後、作業ニーズの知識を実践向けにどのようにわかりやすく説明し、デイケアの実践につなげることができるのかについて考察した。

【方法】デイケアを利用している精神障害を有する人を対象に研究内容を説明し、同意を得られた20名へ個別にインタビューを行った。日常生活において、健康的で幸せな毎日を送るために、どのような必要性や意味を持った作業を選択しているのか、また問題意識や、作業における工夫について理解を深めるためのインタビューガイドを作成し、活用した。許可を得た上でテープレコーダーに録音し、逐語録を作成した。データを継続的に比較しながら分析し、カテゴリー化を進めた。

【結果】対象者は主観的に幸せな人生を実現するために、一日の時間の使い方と作業選択をうまくできるようになりたいと考えていた。作業に従事しながら、「没頭する」、「社会や人とつながる」、「貢献する」、「できるようになる」、「結果を出す」、「期待に応える」、「人で行う」、「挑戦する」、「整える」、「準備する」などの、様々な意味を求め、達成しようと工夫しながら生活していた。また、その体験を通じ、自己の状況や解決すべき事を理解し、学ぶ過程があり、幸せな人生像を徐々に見出すことを可能にしていた。

【考察】Leufstadius ら¹⁾は、精神障害を有する人々の意味のある作業について調査し、主に「人、まわりの世界とつながる」、「人生におけるよろこびや楽しみ」、「生産的であることと達成感」、「時間の流れの中に日課や計画があること」、「健康維持への配慮」などの様々な意味を見出し、創造していると報告し、その作業の構造や設定といった形態は、異なっていたと述べた。本研究においても、健康や幸せにつながる作業ニーズとして、意味が重要な概念として見えてきた。一方、精神科作業療法やデイケアなどでは、作業の意味よりも作業の形態を見えるようにしていることが多く、例えば、「スポーツ」、「園芸」、「料理」といった名称をプログラムにつけて実施していることが多い。しかし、この方法は、クライアントの実生活での作業の可能化を通して健康促進につなげるという本来の目標に焦点があたりず、実生活において可能にしたい作業を病院やデイケアで行うことに終始してしまいがちである。そこで、筆者らは、例えば「没頭する」、「社会や人とつながる」などの意味をプログラムの名称として位置づけ、そのテーマ実現のためにどのような取り組みをデイケアで行う必要があるのかを利用者と検討しながら、プログラムを運営する方法を取り入れること

を提案したい。発表においては、実際のデイケアで見えてきた課題と対応策として検討した内容を踏まえて報告する。

文献: 1) Leufstadius C, Erlandsson LK, Björkman T, & Eklund M: Meaningfulness in daily occupations among individuals with persistent mental illness. J Occup Sci 15(1), 27-35, 2008.

Occupational Needs and Support Program for People with Mental Illness Living in the Community: Grope and Consideration for Support Program towards Realization of Occupational Meaning

Takuya Noguchi¹⁾, Miyuki Minato²⁾

1) Wani Clinic of Occupational Therapy

2) Aichi Medical College

Introduction: Occupational therapy targeted enabling occupation supporting health with development of occupational science. However, in order to tie implementation of the group program in occupational therapy and day care program in the field of psychiatry for enabling occupation of each client, we need to discuss how we translate occupational science to practice. We investigated occupational needs of people with mental illness living in the community and discussed how we could translate the knowledge of occupational needs for practice of daycare program.

Method: I explained about the study to those who participated in day care program. I interviewed individually with 20 informants with mental illness we obtained their informed consent. We made the interview guide to understand occupational needs and strategies. After obtaining their permission, we recorded the interview on tape recorder, and transcribed them. We analyzed the data using coding method and constant comparative method.

Results: The results showed that informants needed to control time use and occupational choices, wanted to fulfill various meanings such as “absorbing”, “linking to people and society”, “contributing”, “enabling”, “accomplishing” and devised to realize meaning in their life. Through their experiences, the informants noticed their conditions and knew things what they had to do to solve problems. Informants gradually fulfilled themselves by finding vision for their own happy living, through learning processes.

Discussion: Leufstadius investigated the meaningful occupation of people with mental disorder and reported five main themes of meaningfulness: 1) connection with others and the world

around them, 2) enjoyment and fun in life, 3) being productive and having a sense of achievement, 4) being occupied and having routines and projects in the stream of time and 5) taking care of oneself to maintain health. Leufstadius discussed that people with mental illness create and find meaning within their daily occupations but different occupational structures and settings. Through this research, we also found the important concept of a meaning as occupational needs which promote health. On the other hand, in actual psychiatry occupational therapy and day care program, occupational therapists name the program, such as "sport", "gardening", and a "cooking" in many cases, make the form of occupation visible. By this method, a focus does not hit the original target healthy promotion through enabling occupation for clients. Also, occupational therapists tend to make occupational opportunities in a hospital or day care program from beginning to end. Then, we would like to propose how to design a program that occupational therapists name a "meaning" as a name of a program and plan with clients collaboratively. We present based on the actual experience in day care program.

地域在住高齢者の作業的エンパワメントを可能とする環境支援アプローチの効果—ランダム化比較試験(第1報)

藪脇健司¹⁾, 吉岡英章²⁾, 山口竜矢³⁾,
大貫 操⁴⁾, 稲垣成昭⁵⁾

1) 吉備国際大学保健医療福祉学部,

2) デイサービスだいち, 3) 牧田病院デイケアセンター,

4) 医療法人松田会松田病院, 5) 東北福祉大学健康科学部

【背景】地域で生活する要支援・介護高齢者は、加齢や疾病の影響により日常生活で何らかの援助を必要とすることから、本人が望む作業に十分に取り組めないという作業的不公正¹⁾の状態に陥りやすい。そのため作業療法では、クライアントの健康的な生活を取り戻すために、本人が望む多くの作業へ取り組めるよう支援する。しかし、身体機能、情緒機能、認知機能の変化によって、慣れ親しんだ環境をうまく利用できなくなったり、環境そのものが変化することで作業遂行に問題が生じ、不公正の解消が難しいことも多い。

そこで、環境への介入を通して、意味のある作業を行うためのエンパワメント（以下、作業的エンパワメント）を可能にするアプローチが有用な手段の一つとして考えられる。Polatajko ら²⁾は作業の可能性のための解決法とし

て、環境の物理的、社会的、文化的、制度的要素を変化させることで、適合をもたらす挑戦を軽減することができると述べている。しかし、作業療法における環境支援アプローチが、地域在住高齢者の健康状態を改善することを示すエビデンスは、国内外の研究を概観しても未だ不十分である。

【目的】本研究では、在宅要支援・介護高齢者を対象とした作業療法において、環境支援アプローチがクライアントの健康関連 QOL に与える効果をランダム化比較試験によって明らかにすることを目的とする。

【方法】全国 8 施設の居宅サービスを新規に利用する 65 歳以上の要支援・介護高齢者 60 名を対象とした。これらの対象者を、作業療法士による包括的な環境支援を行う「介入群」と運動療法を中心としたリハビリテーションサービスを提供する「統制群」の 2 群に割り付けた。割り付け方法には、前期高齢者と後期高齢者の各層で均等に割り付ける層化ブロックランダム割り付け法を用いた。なお、本研究は社団法人日本作業療法士協会課題研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（研究番号 2010-03）。介入期間は 3 か月とし、包括的環境要因調査票（以下、CEQ）³⁾を用いた作業療法を実施した。CEQ は、在宅高齢者の QOL に影響する 3 因子 14 項目の環境要因で構成されるクライアント中心の調査票で、本人が満足した生活を送るために今よりも変えたい環境について聴取し、それについて話し合うことで作業的エンパワメントを高めるための支援計画を作成することができる。介入効果を判定する健康関連 QOL 尺度には SF-36 を用い、開始時（ベースライン）と 3 か月後に実施した。全ての統計学的解析には、IBM SPSS statistics 20.0 を使用し、有意水準を 5% とした。

【結果】対象者は介入群 29 名、統制群 31 名に割り付けられたが、本報では既にデータ収集が終了し、欠損値がない介入群 16 名、統制群 13 名を分析した。平均年齢は介入群 83.0±8.2 歳、統制群 85.0±6.3 歳で、年齢やベースラインの要介護度、ADL 能力（N-ADL）、SF-36 で両群に有意な差は認められなかった。介入群への環境支援アプローチは、相互交流環境因子の「外出しやすい環境」（4 名）や「人の役に立てる環境」（2 名）、安心生活環境因子の「落ち着いた気分でいられる環境」（3 名）の改善を目的としたものが多かった。SF-36 の変化量を Mann-Whitney U test によって検討したところ、Physical Functioning (PF) ($p<.05$)、Role Physical (RP)、Role Emotional (RE) (ともに $p<.001$)、Mental Health (MH) ($p<.01$) の 4 項目で介入群の健康関連 QOL が有意に向上していた。

【結論】本研究では、在宅要支援・介護高齢者を対象と

したランダム化比較試験を実施し、作業療法における環境支援アプローチの効果を検討した。その結果、運動療法を中心としたリハビリテーションサービスと比較して、クライアントの身体機能、日常役割機能（身体）、日常役割機能（精神）、心の健康という健康関連 QOL が有意に向上し、本アプローチの有効性が明らかとなった。これは本人が必要とする環境が改善されることで、本来担うべき役割、つまりその人にとって重要な意味をもつ作業が可能になったためと考えられる。また、CEQ が作業的エンパワメントを可能にするための有用なツールであることも示された。

Environmental Supportive Approaches for Enabling Occupational Empowerment of Community-Dwelling Elderly: First Report of a Randomized Control Trial

Kenji YABUWAKI¹⁾, Hideaki YOSHIOKA²⁾,
Tatsuya YAMAGUCHI³⁾, Misao ONUKI⁴⁾,
Shigeaki INAGAKI⁵⁾

1) Kibi International University,

2) Adult Day Services Center Daichi

3) Makita Hospital Day Care Center,

4) Matsuda Hospital, 5) Tohoku Fukushi University

Objectives: The purpose of this study was to examine the effects of environmental supportive approaches on the occupational therapy of community-dwelling elderly with healthcare needs through a randomized controlled trial.

Methods: Subjects were 60 elderly individuals who began using home care facilities at 8 locations in Japan. These subjects were divided into blocks of those >75 years of age and those <75 years of age for stratified block randomization and allocated to either the intervention or control group. The study protocol was reviewed and approved by the Research Ethics Committee of the Japanese Association of Occupational Therapists (No. 2010-03). Subjects in the intervention group completed a Comprehensive Environmental Questionnaire (CEQ) and received occupational therapy for three months. The control group received exercise-centered rehabilitation. Effects of the intervention were assessed using the MOS 36-Item Short-Form Health Survey (SF-36). IBM SPSS statistics 20.0 was used for statistical analysis. $P < .05$ was considered statistically significant.

Results: Current analysis of 16 subjects in the intervention group and 13 subjects in the control group revealed that environmental supportive approaches led to significant improvements in Physical Functioning (PF), Role Physical (RP), Role Emotional (RE), and Mental Health (MH) items of the SF-36 questionnaire in the intervention group compared to the control group (Mann-Whitney U test).

Conclusions: These findings suggest that environmental supportive approaches via occupational therapy effectively improve health-related QOL of elderly living at home. Moreover, this study demonstrated that the CEQ is an effective tool for assessing the occupational empowerment of community-dwelling elderly.

- 1) Townsend E: Occupational therapy's social vision. Can J Occup Ther, 60: 174-184, 1993.
- 2) Polatajko HJ, Davis J, Cantin N, et al: Occupation-based practice: The essential elements. Enabling Occupation II, CAOT Publications ACE, 203-227, 2007.
- 3) Yabuwaki K, Yamada T, Shigeta M: Reliability and validity of a Comprehensive Environmental Questionnaire for community-living elderly with healthcare needs. PSYCHOGERIATRICS, 8: 66-72, 2008.

特養ホームに入居する高齢者の作業ストーリーを家族と共有した経験

上江洲 聖

日本赤十字社沖縄県支部 那覇市安謝福祉複合施設

【はじめに】特養ホームで攻撃的、自己中心的な言動が問題と評価されていた女性に、作業的ストーリーテリングを促し、作業的ストーリーメイキングを試みた。クライアントは過去を振り返って作業的存在としての自己を語る過程で、将来に向けて現実的に可能な物語を再構築することができた。今回の経験から中程度の認知症があっても作業的存在としての自己を語ることは可能であると再確認できた。ストーリーを家族および職員と共有することで彼女に対する態度に変化があることも確認できた。今回の経験を通して考察したことについて報告したい。報告することについて本人と家族に説明して承諾を得た。

【クライアントについて】元役所職員，定年後は裁縫教室の先生，80代女性，特養ホームに入居して3年経過。職員は彼女の自分を自己中心的だと評価していた。やりたいことはないかと確認しても答えず，歩行訓練だけを強く要望した。機嫌が悪い時は攻撃的になり，職員に対する暴言・暴力があった。彼女の娘は問題行動について謝ることが多かった。脳梗塞の既往，運動麻痺は軽度。中程度の認知症。

【介入戦略】作業選択意志決定支援ソフト(ADOC)を使用して作業的ストーリーテリングを促す。ADOCは日常生活上の作業が描かれた95枚のイラストを使用する。iPadに表示されたイラストを見たクライアントが価値のある作業を選択する。今回はクライアントが作業を選択した時にストーリーを語るよう促す。その過程でクライアントが障がいを持ちながらも人生の再構築ができることを期待する。また作業的存在として生きるための戦略についてOTと共に考えるように促す。クライアントのストーリーは家族や職員らと共有し，彼女が作業的存在としての感覚を取り戻すための支援をするよう促す。

【介入の結果】彼女が選択した手工芸，墓参り，歩行，友人や家族との交流について意味を尋ねた。歩行は墓参りへの参加を意味しており，彼女が施設入所後に亡くなった夫の葬式に，彼女は参加できなかったことをずっと悲しんでいた。手工芸は編み物教室を運営していた頃の自分を象徴しており，作品や作品作りを通して自分らしさや親愛を相手に伝える目的があることがわかった。OTはそれらの作業に現在はどういう形で参加できると思うか質問し，その作業を実現するために必要な物理的環境や人的環境について語るように促した。これから先の新たな物語についてはOTも意見を提案し，実現可能な作業について語り合った。彼女が語った物語と作業参加のための計画を整理し，OTは施設職員と娘に伝えた。

彼女の娘は初めて墓参りへ彼女を連れていった。また，彼女が昔作った手工芸作品を施設に持ち運び，現在の彼女の能力で取り組める作品作りについて彼女と意見交換をした。彼女は現在の能力でも取り組める工夫について自ら提案することができた。彼女と娘，OTは手工芸が彼女にとって家族，友人らを喜ばせる存在であることを象徴していると言語化して確認できた。

【考察】今回の経過から確認できたことが3つあった。1つめは，機能訓練を希望するクライアントでも，意味のある作業を喚起させる支援があれば作業的ストーリーテリングの過程を促せること。2つめは，OTとクライアントが始めた作業的存在としての感覚を取り戻す過程に，家族と職員も参加できること。3つめは，認知症高齢者

と評価された者であっても作業的ストーリーメイキングを促せること。

Experience to share with family stories of occupational to move into a nursing home elderly

Sei Uezu

Aja welfare complex in Naha,
Okinawa Prefecture Red Cross branch

Introduction

A woman is aggressive behavior, self-centered has been rated as having a nursing home. I encourage storytelling of her occupational, we tried making a story occupational together. She talked about the self as being an occupational of looking backwards. She was able to reconstruct the story that can be realistically for the future. I was able to tell the self-check as the existence of occupational even if there is dementia, and from this experience am possible. Was also confirmed that there is a change in attitude toward her in that I am a story to share with family and staff. I want to report about what was discussed. I consent to explain to the individual and family about what to report.

For client

She was the office staff yuan. After retirement she was a sewing teacher in the classroom. women in their 80s. She was three years after you move into a nursing home. Staff has been evaluated and that of her self-centered. Did not answer even if I want to do to make sure that she is not. She was strongly request only gait training. In a bad mood when she is aggressive, there was verbal abuse and violence against staff. Her daughter was often apologize for the problem behavior. She had a history of cerebral infarction. She had dementia of mild and moderate motor paralysis.

Intervention strategy

I encourage storytelling of occupation with (ADOC) Aid for Decision-making in Occupation Choice. ADOC will use the 95 pieces of occupation on the illustrations were drawn daily life. Client selects a valuable work from the illustrations appear in the iPad. I expect to be able to rebuild the life he has many disabilities she. I encourage her to consider along with the OT so that strategies for live occupational as existence. Her story to share with her family and officials. I encourage them to help regain a sense for her occupational as the existence and.

A result of the intervention

I asked the meaning handicraft that you selected her grave,

walking, for exchanges with friends and family. She said that it symbolizes the time of his craft had been operating a knitting classroom. I understood she had a purpose and keep a quality of her work through. I think the question now is whether she can participate in what way to occupation. I urged her to talk about the environment and human physical environment necessary to achieve the occupation. I am a new tale about the future made a few suggestions to her. She talked about goal of occupation that can be realized. I was planning to organize the occupation and for participation in the story she told. I told the story of the facility staff and daughter and then to organize.

Her daughter took her to the grave for the first time. Daughter is carrying on the work facility handicrafts she made long time ago. Daughter was an exchange of opinions with her about her ability to make work in the current tackle. She was able to tackle in its proposed A device for the current capacity. She and her daughter and I can confirm to each other over language and symbolizes that the family is a pleasing presence, a friend from her for handicrafts.

《作業の多角的視点》

身体制限を伴う高齢者の作業遂行能力から病前の作業遂行能力を予測できる可能性

齋藤さわ子, 谷口美智子, 石井愛美,

伊藤文香, 真田育依

茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科

【はじめに】作業遂行の向上, 作業の再獲得や作業の習得を支援する作業療法士にとって, 支援する対象者の病前(健康時)の作業遂行能力に関する情報は, 対象者と共に作業上の中・長期的な目標を設定する際に有用であるといえる。一般に, 病気になって間もない場合で, 心身機能レベルが同じであるならば, 作業遂行能力が高い人は, 病前の作業遂行能力も高かったと推測されることは多い。しかし, 作業遂行能力は, 遂行される物理的環境やその環境への馴染みの程度, 課題のなされ方, その課題を遂行する意欲など, 様々な要因が相互作用で決まるものであることは, 多くの文献で述べられており, 単純に作業遂行能力を予測することは難しいことが示唆されている。

多くの場合, 心身機能が低下したことにより作業遂行能力が低下した人は, 作業遂行能力の再獲得のために,

病院や施設等で作業療法サービスを受ける。訪問作業療法でない限り, その作業遂行能力向上のための評価, 介入は作業療法室で行われることがほとんどである。つまり, 作業療法士は, その作業療法室という環境で, 作業遂行能力の評価を行い解釈を行う。しかし, その評価結果から, どの程度, 病前の作業遂行能力を予測できるかに関する研究はない。

【本研究の目的】自宅ではないが作業を行うのに必要な空間と道具がそろっている環境での身体制限を負荷された高齢者の作業遂行能力が, 健康時の作業遂行能力とどの程度関連があるのかを調べた。

【方法】対象者は健康な高齢者23名(平均66.8±4.1歳, 範囲61歳~75歳)であった。作業遂行能力を測定する手段は, Assessment of Motor and Process Skills(以下AMPS)を用いた。AMPSは, 物や自分を動かすときのぎこちなさや身体的努力の程度を示す運動技能能力と, 物や空間や時間を構成し適応的に問題に対処できる程度を示すプロセス技能能力の2つの尺度で遂行能力を測定できる。手順は, まず, 自宅ではないが作業を行うのに必要な空間と道具がそろっている環境で, AMPSの施行方法に従い, いつもしている様に対象者自身が選んだ日常生活関連課題を遂行してもらい, 健康時の作業遂行能力を測定した。次に, 対象者に身体制限を負荷し(利き手を使用できないように固定, 利き手側の膝を固定し), 健康時に遂行した同じ環境で同じ課題を遂行してもらい, 身体制限時の作業遂行能力をAMPSにて測定した。なお, 研究実施前に, 研究への同意を文書で得た。データ分析は相関係数を用いた。

【結果】健康時と身体制限時の作業遂行能力の相関は, AMPS運動技能尺度では, $r=0.13$ で有意な相関はなかった。AMPSプロセス技能尺度では, 有意な相関(<0.01)があり, $r=0.54$ であった。

【考察】

本研究の結果から, 自宅ではない場所での身体制限を伴う高齢者の作業遂行能力から, 運動技能面では健康時の作業遂行能力を予測することは難しいことが示された。これは作業遂行能力が様々な要因の相互作用で成り立っていることを示す結果ともいえる。プロセス技能面では, 注意は必要であるものの, 健康時の適応能力を予測することはある程度可能であることが示唆された。今後は, 自宅での環境でも調べ, 実際の生活の場でも同様な結果が出るかどうかを検証したい。

The possibility of estimating the occupational performance abilities from of elderly people with physical limitations to of when they being well

Sawako Saito, Michiko Yaguchi, Aimi Ishii,
Ayaka Ito, Ikue Sanada
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

The purpose of our study was to examine if there was a possibility to estimate occupational performance abilities from of elderly people with physical disabilities to of when they being well. To achieve the purpose in this study, we investigated the relationship between the occupational performance abilities of well elderly people and of when they given physical limitations in the facility.

The participants were 23 well elderly people (Mean of age: 66.8 ± 4.1 years old, range of age: 61~75 years old). The Assessment of Motor and Process Skills (AMPS) was used to measure their occupational performance ability in instrumental activities of daily living (IADL). The participants asked to perform two IADL tasks in a facility by according to the AMPS procedure. Then, they also asked to perform the same two tasks in the same environment with physical limitations (fixed shoulder, arm, fingers and knee on the side of their dominant hand) which given by researcher. The correlation coefficient was used to examine the relationship.

The results showed that the correlations were $r=0.13$ on the AMPS motor skill measure and $r=0.54$ on the AMPS process skill measure. The correlation of the AMPS process skill measure was significant (<0.01).

The result of this study indicated that the occupational performance ability on IADL motor skills of elderly people with physical disabilities would not be useful to estimate that of before their having the physical disabilities. On the other hand, it would be useful to estimate the occupational performance ability on IADL process skills from of elderly people with physical disabilities to of before their having the physical disabilities. In the further study, we would examine in home environment since many elderly people with physical disabilities in a facility have will to live in their house.

自宅でない場所での作業遂行練習が高齢者の遂行に対する意思に与える影響 —作業療法介入を伴う手段的日常生活活動での場合—

谷口美智子, 齋藤さわ子, 石井愛美,
真田育依, 伊藤文香
茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科

【はじめに】料理をする, 掃除をする, ペットの世話を
するなどの, 手段的日常生活活動 (以下, IADL) 獲得に
向けた支援は, その人の生活の場で実施されることが望
ましいと言われている. 一方で, IADL 獲得支援は病院や
施設内で行われることは多い. 作業療法の IADL 介入手
段の1つとして, その人がしたい, する必要のある活動
を, 実際のその活動を遂行するのにふさわしい空間で必
要な道具や材料を用い, 活動全体を通して練習を行い(以
下, 遂行練習), 直接遂行技能を高める方法がある. IADL
再獲得には, 心身機能に特化した介入よりも, 遂行練習
を用いた介入の方が短期間で効果があることは示されて
いるものの, 自宅外での遂行練習が自宅での作業従事
に対する意思にどのような効果があるのかを明らかにする
研究はほとんどない.

【目的】本研究では, 自宅とは異なる環境において IADL
課題の遂行練習を繰り返し行うことが, その課題遂行に
対する意思にどのような影響があるかについて調べるこ
とを目的とした. 研究疑問は, 「高齢者に身体障害を模擬
的に体験してもらい, その身体障害が実際にあると想定
した場合に, 作業従事に対する意思 (課題を遂行する自
信, 自宅で課題を遂行する意志, 遂行した自分の遂行方
法への受け入れ) について, 遂行練習により変化するの
か」とした.

【方法】方法は以下の通りで行った.

1) 対象者: 健康な高齢者 13 名(平均年齢 65.5 歳, 年齢
範囲 60~71 歳). 全員が自らが行わなければならない
IADL は自立し, シルバー人材センターに所属し働いてい
た. 2) 手順および手段: まず, 本研究の目的と内容に
ついて, 口頭および文書にて説明を行い, 書面にて同意
を得た. 対象者本人が普段行っている IADL 課題を 2 課
題選び, その課題をするのにふさわしいが自宅でない環
境において, 身体制限を負荷した状態(利き手側上肢・手
を固定し, 利き手側の膝関節を固定)で, 概ね 1 週間に 1
回の頻度で 5 回 (1 回 40 分程度) の遂行練習を行って
もらった. 2~4 回は作業療法士による介入を伴う練習とし
た. 課題に対しての意思の変化は, 6 点尺度の質問用紙を
用い調べた. 質問紙には, 遂行練習前, 遂行練習 1 回目

後（以下、1回後）、遂行練習5回目後（以下、5回後）に回答してもらった。3）データ分析：ウィルコクソンの符号付順位検定で分析を行った。

【結果】課題を遂行する自信は、遂行練習前と5回後、1回後と5回後では有意に向上した。遂行方法の受け入れは、1回後と5回後では有意に向上した。自宅で課題を遂行する意志は、遂行練習前と5回後で有意差はなかった。

【考察】自宅でない場所での5回の遂行練習により、その課題を遂行する自信や受け入れは向上することが示された。自宅で課題を遂行する意志には統計的な有意差はなかった。しかし、自宅で遂行する意志の変化の内訳は7名の対象者が向上し、3名が変化なく、3名は低下しており、必ずしも肯定的な影響とは限らないが、遂行練習がその課題の自宅での従事への意志に影響を及ぼしていることが考えられた。

【まとめ】本研究により、自宅でない場所での作業療法介入を伴う作業遂行練習は、高齢者のIADL課題遂行に対する意思に影響を与えることが示唆された。

The effects of occupational performance exercises with occupational therapy in a facility on intentions of the elderly people to perform instrumental activities of daily living (IADL) tasks

Michiko Yaguchi, Sawako Saito, Aimi Ishi,
Ikue Sanada, Ayaka Ito

Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

The purpose of this study was to examine the effects of occupational performance exercises with occupational therapy in a facility on the intentions of the elderly people to perform instrumental activities of daily living (IADL) tasks. The intentions included their confidence of performing the tasks, their will of performing tasks at home, and acceptance of the way of performing the tasks.

The Participants were 13 healthy elderly people (mean of the age 65.5 years old, the range of the age 60~71 years old). They were independent on the instrumental activities of daily living (e.g., vacuuming, cooking, caring plants) and had a part-time job.

The participants were asked to choose 2 IADL tasks that they were familiar. Then, they were also asked to perform the tasks while they were given physical limitations (fixed shoulder, arm, fingers and knee on the side of their dominant hand) by the researcher. They performed the tasks with the physical

limitations five times, once a week, as exercise. They received occupational therapy in the second to forth exercise. A questionnaire was implemented before the first and after the fifth performance exercise if their intention was changed by the occupational performance exercises. The Wilcoxon signed-rank test was used for the data analysis.

The results showed that there were significant differences on their confidence of performing tasks and their acceptance of the way of performing the tasks, but on their will of performing tasks at home. The results indicated that their confidence of performing tasks and their acceptance of the way of performing the tasks were positively changed by the five occupational performance exercises. Although there was not statistical significant difference on their will of performing tasks at home, nine participants (seven of them positively) changed their score. These results also indicated that occupational performance exercise may affect their will of performing tasks at home in some ways.

In conclusion, the results of this study showed that intentions of the elderly people with physical limitations to perform IADL tasks were influenced by occupational performance exercises at non-home environment with occupational therapy.

作業療法学生における作業的公正～質問紙による定量的調査の試み～

今井忠則, 下条真穂

茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科

【背景と目的】作業的公正 (Occupational justice) に関する研究は、質的・現象学的研究が多く報告されているが、集団を対象とした量的・実証的研究は少ない1-3)。この理由の一つとして、集団を対象に作業的公正を調査する質問紙が開発されていないことが挙げられる。作業的公正の定量的調査が可能となれば、集団や社会レベルにおける作業的公正の問題を、疫学的根拠を持って社会に示すことが可能となるだろう。また、質的研究の知見と併せて、作業的公正を多角的に検討することで、この概念の発展に寄与することが期待される。そこで、本研究では、①作業的公正の定量的把握の可能性を検討すること、及び②作業療法学生における作業的公正の状態を明らかにすることを目的として、質問紙の試作と定量的調査を実施した。

【方法】1) 先行研究1-4,他)を基盤として、“作業的公正

／不公正”及び“作業剥奪 (occupational deprivation)”, “作業疎外 (occupational alienation)”, “作業不均衡 (occupational imbalance)” “作業周縁化 (occupational marginalization)”を操作的に定義し, 全7項目から構成される質問紙を作成した。2) 作業療法学学生151名を対象に質問紙調査を実施し (回収率94.0%), 回収者142名 (男性39名, 女性103名, 平均年齢20.4±1.4歳) における作業的公正の記述統計量を算出した。

【結果】全ての項目において欠損がなく回答率は100%であった。作業剥奪の質問は, 否定的回答 (=作業剥奪の状態) が37.3%であった (4段階評定を2段階に合計)。同様に, 作業疎外と作業不均衡はそれぞれ16.2%と56.3%であった。作業周縁化の3項目はそれぞれ33.8%, 22.5%, 29.6%であった。また, 作業的公正の全般的質問は, 否定的回答 (=作業的不公正状態) が43.7%であった。

【結論】回答率が高く, かつ回答が十分に分散していたので, 作成した質問紙は統計的調査に使用できると考えられる。つまり, 作業的公正の定量的把握の可能性が示された。また, 調査によって, 約四割の学生が作業的不公正な状態と感じているということが明らかとなった。

【文献】

- 1) Marjorie E. Scaffa, S. Maggie Reitz, Michael A. Pizzi.: Occupational therapy in the promotion of health and wellness. F.A. Davis Company, 2010; 135-156.
- 2) Townsend E. Polatajko H.(編著), 吉川ひろみ, 吉野英子(監訳): 続・作業療法の視点 - 作業を通しての健康と公正. 大学教育出版, 2011; 107-113.
- 3) 吉川ひろみ: 「作業」って何だろう - 作業科学入門. 医歯薬出版, 2008; 91-94. 4) Townsend E. Wilcock AA.: Occupational justice and client-centred practice; a dialogue in progress. Can J Occup Ther, 71: 75-87, 2004.

Occupational justice in occupational therapy students -A pilot qualitative questionnaire survey-

Tadanori Imai, Maho Gejou
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

【Background & Purpose】 Many qualitative studies have been reported on “Occupational justice” (OJ), but there have been few quantitative studies. It is one of the reasons that a questionnaire about OJ has not been developed. If a quantitative survey about OJ can be done, we become able to show a problem of OJ in a group and the social level to the society with scientific evidence. In addition, in conjunction

with the information from many qualitative studies, we become able to explain OJ from multifaceted angles. And it will contribute to the development of the concept of OJ. The purposes of this study were to consider the possibility of a quantitative survey about OJ and to investigate the condition of OJ in occupational therapy (OT) students.

【Methods】 1) Based on precedent studies, we defined an operational definition of the concept of “Occupational justice / injustice”, “Occupational deprivation”, “Occupational alienation”, “Occupational imbalance” and “Occupational marginalization”. And we constructed a 7-item questionnaire. 2) We carried out a questionnaire investigation in 151 OT students (the recovery rate was 94.0%), and calculated the description statistic of 142 respondents (39 men, 103 women, mean age 20.4 yrs).

【Results】 All questions were answered completely. As for the question of “Occupational deprivation”, the negative answer rate was 37.3%. Similarly, negative responses for “Occupational alienation” and “Occupational imbalance” were 16.2% and 56.3%, respectively, and for the three items in “Occupational marginalization” they were 33.8%, 22.5%, and 29.6%, respectively. Finally, as for the general question of “Occupational injustice”, the response rate was 43.7%.

【Conclusion】 Since the answer response rate was very high and the dispersion was good, the questionnaire could be made available in a statistical questionnaire survey. And the survey results indicate that more than 40% of students felt they were under injustice condition.

Evaluation on Teaching of “Human Occupations” to Occupational Therapy Students in Hong Kong

Chi-man TSUI

Clinical Instructor, Department of Rehabilitation Sciences,
HKPolyU

Introduction

“Occupations” are the core components in the practice of Occupational Therapy (OT). Undoubtedly, learning “occupations” is essential for OT students. There is a core subject titled “Human Occupations” in the first year study of the undergraduate OT program in Hong Kong. Upon completion of the subject, students are expected to be able to grasp the following learning outcomes:

- Understanding the nature of occupations
- Performing activity analysis, basic self-care and work assessment
- Planning an activity in the area of arts, crafts, plays, and work activities
- Describing the change of occupations in different contexts and life span development.

The modes of teaching and learning include lectures, tutorials and field visits. Lectures cover the theories and principles of occupational performance and the occupational role development across life span. During tutorials, students discuss occupational analysis, activity analysis, ADL assessment and use of assistive devices, and practise different kinds of work samples, evaluation tools and play/recreational activities. A number of field visits to school and hospice settings are arranged.

Purpose

This study aimed to evaluate the effectiveness of the teaching of the subject “Human Occupations” to the first year undergraduate OT students in Hong Kong.

Methods

Students (n=28) of the first year study of the baccalaureate OT program in a university in Hong Kong who enrolled in the subject “Human Occupations” were invited to anonymously fill in the Student Feedback Questionnaire (SFQ) in the end of the last session of the subject. The SFQ was designed and validated by Educational Development Centre of the university and it

mainly consisted of four questions, namely, “Clear understanding of what I am expected to learn”, “Teaching and learning activities helped me to achieve the subject learning outcomes”, “Subject contents organized logically and clearly”, and “Enabled me to relate the knowledge taught to my professional career”. The respondents rated the questions on a five-point Likert scale with 5 denoting “strongly agree”, 4 denoting “agree”, 3 denoting “no strong view”, 2 denoting “disagree”, and 1 denoting “strongly disagree”.

Results

The means were high (3.9 or above out of 5) in all of the four questions. The statistics are summarized in the following table. Besides, the students were found to have mastered more concretely the various dimensions of different occupations across life span (from early childhood to late adulthood) and the resulting changes associated with normal development, aging, injuries, diseases and disabilities etc.

Questions	Mean	SD
Clear understanding of what I am expected to learn	4.0	0.6
Teaching and learning activities helped me to achieve the subject learning outcomes	4.0	0.6
Subject contents organized logically and clearly	4.0	0.6
Enabled me to relate the knowledge taught to my professional career	3.9	0.7

Discussion and Conclusion

The results reflected that the students learnt very well in the subject. They successfully grasped the essence of the core element of OT – occupations, through a series of tailored teaching and learning activities. Having a close linkage between the knowledge and their future professional career, the students valued very much this good preparation of their professional life. While it is common and yet somehow paradoxical that quite many OT freshmen worldwide find the soul of their profession – occupations too abstract to master, this well-structured subject has successfully demonstrated the ways to enhance the learning. The curriculum can serve as a useful reference for the design of similar subject(s) elsewhere.